

言語における対象指示の構造

古 賀 恵 介*

1. はじめに

言語にとって対象指示 (reference) は、最も核心的な問題の一つである。なぜなら、実際の使用においては、言語は (現実あるいは想像上の) 何らかの事物を対象として指し示すことで、初めてその機能を果たすことができるからである。言語研究の歴史において、言葉が事物を表すという事実に対する関心は古代ギリシャの昔から継続して存在してきた (Harris and Taylor (1989)) が、指示構造そのものを最初に学問の俎上に載せて考察の対象としたのは、19 世紀末のフレーゲ、ラッセル、ヴァイトゲンシュタイン等の論理学者たちであった (野本 (1988))。彼らの学的伝統は、今日の形式意味論 (Formal Semantics) にまで受け継がれている。

一方、文法研究の側で対象指示の問題が取り上げられるのは、主に冠詞や数量詞の用法や定性 (definiteness)・特定性 (specificity) の問題に関わる場合であり (e.g. Hawkins (1978), Heim (1982), Lyons (1999))、そこでの議論には、本稿がこれから展開するような、人間の認識や概念の構造の本質的把握を基礎とした総合的分析を行おうとする志向性が (一部を除けば) 欠けていたと言わざるを得ない。(このことは、当然ではあるが、論理学的意味論の流れについても言えることである。なぜなら、論理学的意味論は、数学の公理系モデ

* 福岡大学人文学部教授

ルの考え方を意味および対象指示の分析に応用したものであって、そこでは人間の認識能力の特性などは考慮の外だからである。)

これに対して本稿は、三浦 (1967, 1976) の言語過程説および Langacker (1987, 1991, 2008) の認知文法 (Cognitive Grammar) 理論の言語観に立脚しながら人間の認識構造のあり方を理論的にモデル化した上で、従来、文法学者があまり立ち入らなかった、言語の対象指示構造の系統発生的・個体発生的な成り立ちを認知言語学的に探ってみようとする試みである。特に、対象指示の基本構造の考え方は、三浦つとむの言語過程説を踏襲しているということを明記しておきたい。

2. 対象指示とは何か

私たちが日ごろから使っている言葉のあり方を反省してみると一つのことにごづく。それは、「机」「椅子」「本」「書く」「歩く」「座る」などといった多くの単語が何らかの事物 (モノやコト) を指し示している、ということである。通常、この働きのことを《指示》(reference) と呼び、言葉によって指示される事物のことを《指示対象》(referent) または単に《対象》と呼ぶ。

今「単語が何らかの事物 (モノやコト) を指し示している」と述べたが、実は、これは正確ではない。言語は人間が何らかのメッセージを伝えるために用いるものである。そうである以上、言語自体が何か特定の対象を指示するというのではなく、人間が言語を用いて対象を指示するのである。つまり、話者が何らかの対象を指し示したいと思うときに、言語という代用物を用いるということである。この関係をここでは代用指示 (substitutive reference) と呼んでおこう¹。

では、このように言語を用いて事物を表すとき、そこに、代用物たる言語と

¹ 代用指示という考え方は、言語過程説にも認知文法にも見られない、筆者独自の考え方である。

指示対象との間にはいかなる結びつきが存在するのだろうか？これは言い換えれば、その結びつきを保証するいかなる仕組みが存在するのか、という問いである。この仕組みの特殊性（或いは、特異性）がわかりやすいように、事物を絵に描いて表す場合と比べてみよう。絵は、対象となる事物の形・色などの視覚的特徴を平面上に再現することで、その内容を伝える。対象物が犬で、それを絵に描いて表そうとすれば、その犬の形・色などの見た目を線や絵の具などを用いて平面上に再現しなければならない。ところが、言語はそうではない。対象の具体的特徴を何ら再現するものではないのである²。とすると、言語は、対象をどうやって表しているのか？

端的に言えば、対象に名前をつけ、その対象と名前（＝言語）の結びつきを社会的取り決め（慣習・規範）として集団で共有することによって表すのである。「社会的に共有されている」という点が重要なポイントであり、この条件を満たす限りにおいては、対象がどのような名前と呼ばれようと構わない。それゆえ、例えば、犬のことを「イヌ」と呼ぶのは日本語社会の特殊事情であって、他の言語で同じように呼ばなければならぬいわれはない。実際、英語では dog、ドイツ語では Hund、フランス語では chien というように、それぞれ違う名称で呼ばれている。つまり、対象と言語の間に「社会的取り決め」という以上の必然的な結びつきはないのである。言わずと知れた、言語における恣意性 (arbitrariness) という特質である。

恣意性という概念が言語学の世界で広く認められるようになったのは、ソシュールの『一般言語学講義』の影響であるが、言語と対象物の結びつきのあり方 (i.e. 必然性の有無) をめぐる議論は既に古代ギリシャの昔において見られた (Harris and Taylor (1989))。アイデア論を提唱したプラトンは、物とその名前の間に何か必然的な結びつきがあると考えていたし、その弟子アリストテ

² 三浦 (1976: 第1章) には、このほかに、絵が対象を捉える作者の視点を必然的に表す性質を持つことなど、言語と絵画表現をめぐる興味深い比較がなされている。

レスは、(ソシュール同様に) 両者の結びつきは慣習によるものであると考えていた。(ソシュールの記述では、恣意性は、言語形式と指示対象との関係ではなく、言語形式と概念との間の関係として語られている。しかし、この後に論じるように、概念は対象認識を前提に出来上がってくるものであり、本来は、対象指示の構造の特性として規定されるべきものである。)

言語と対象の結びつきに関しては、恣意性のほかにもう一つ重要な特徴がある。上に挙げた「机」「椅子」などの単語を見てみるとわかるが、これらはいずれも一つ一つの対象そのものにつけられた名前ではなく、その対象物が属する類 (= 集合) につけられた名前である。「机」と言えば、大きさ・形・色・手触りなどの感覚的特徴 (感覚器官で捉えることができる特徴) がどのようなものであっても、机の仲間でありさえすれば「机」という語で表すことができる。つまり、言葉というものは、対象をその《類の認識》というフィルターを介して指し示すのである。この類の認識のことを概念 (concept) と呼ぶ。

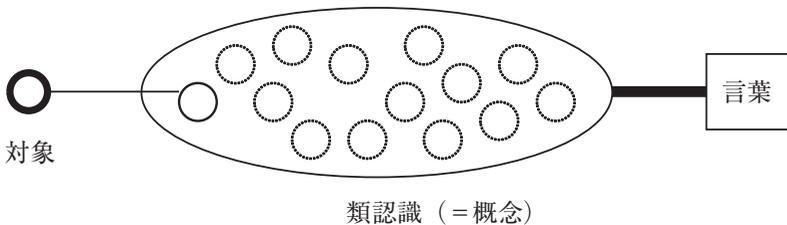


図1 概念を介した対象指示

言い換えれば、言語における対象指示の本質は、概念というフィルターを通した代用指示だということなのである。

以上のように、言語による対象指示には、代用指示と概念による媒介という二重の構造が存在する。そこで、以下では、このそれぞれの構造について、その成立過程を詳しく見てみたいと思う。

3. 代用指示の構造

言語のような人間のコミュニケーションにおいては代用指示というのが当たり前になされるわけだが、コミュニケーション全体を見渡してみると、代用指示は決して当たり前存在するものというわけではない。その成立にあたっては、他の形態のコミュニケーションが、いわばその予備段階の役割を果たしているのである。代用指示の背後にどのような予備段階が存在するかは、人間がコミュニケーションにおいて代用指示を用いるようになるまでの諸段階を論理的に整理しながら辿ってみることで理解することができる。本節では、代用指示の予備段階となるコミュニケーション形態として、直接表出（direct expression）と直接指示（direct reference）の2つを仮定して、代用指示成立の基底にある構造を探ってみる。

3.1. 直接表出

人間のコミュニケーションの最も原初的な形態は直接表出である。何の代用物や媒介物も用いずに、相手に対して直接的にシグナルを送ることである。



図2 直接表出

これの最も端的な例は、赤ん坊の泣くという行為である。人間の赤ん坊は、生後数ヶ月間は、泣くという行為を通じてしか自らの要求を外部に伝えることができない。お腹が空いたり、排泄物やその他の不快感があったりしても、それを言葉で言い表したり、手や指で指し示したりすることはできない。ただ単に、泣いて、不快であることを伝えるのみである。周囲の人間は、赤ん坊の泣くという行為が不快感を表す行為であることを知っているのも、その原因をあれこ

れ推測しながら対処するのである。もちろん最初は、「不快感を伝えよう」というような明確な意志に基づく行為ではなく、おそらくは本能に基づく反射 (reflex) に近い行為であろう。しかし、始まりは本能的なものであったにせよ、この《泣く→対処する》という対応連鎖の繰り返しを通じて、赤ん坊は、外に向けて訴えかければそれに対処してもらえる、ということを知り取るのである。それは、当然、「外に向けて訴えかけよう」という意志の芽生えを促すものでもある。

直接表出の例として赤ん坊の泣く行為を挙げたが、直接表出は何も赤ん坊に限って見られるものというわけではない。大人であっても、ドアに手を挟んで痛い思いをしたときには (ほとんど反射的に) 何らかのうめき声をあげるし、嬉しいことがあったとき、悔しいことがあったときなどは、その感情を吐露するような声を上げるものである。これらの反応には必ずしも言語とは言えないものも混じっているが、明らかに言語的な形態をとるものがあることは、少し反省してみればすぐにわかる。あらためて言うまでもないが、感嘆詞あるいは間投詞 (interjection) がそれである。痛い思いをしたときに「いたっ！」(英語なら Ouch!) と言ったり、何か (意外なことに) 気づいた時に「あらっ！」(英語なら Oh!) と言ったりする。何か失敗をしたときには「しまった！」などとも言う。これらは、名詞・動詞・形容詞・副詞などのように対象として捉えられたものやそのあり方を描写するのではなく、話し手の心のあり方を直接に表に出しているのである³。これらは、言語という代用指示 (による対象指示) の体系の中に、直接表出という原初的な機能が継承され、保存されたもの

³ 言語の中にこのような直接表出的表現があることは、多くの文法研究者によって洞察されていたことである。早い例で言えば、言語過程説を提唱した国語学者の時枝誠記は、その「主体的表現」という概念を説明するにあたって、直接表出的表現を取り上げている。(時枝 (1941)) また、近くでは、Hurford (2007: Ch. 6) にも、動物のコミュニケーションから人間の言語への進化を結ぶ結節点という観点から、表出表現をめぐって同趣旨の論述が見られる。

だと言える。間投詞は対象指示抜きの表現であるだけに、通常の文構造の中には組み込まれない⁴。何故なら、通常の文構造は《事態》という対象の描写を行うための複合構造であり、その構造を形作る各部分は、何らかの形で対象指示的な（或いは対象指示に関連する）部分を持っていないからである⁵。

- (1) (うっかり朝寝坊をしたことに気づいて) しまった!
- (2) *うっかり朝寝坊をしたことは、しまった!
- (3) うっかり朝寝坊をしてしまった。

例えば、間投詞「しまった」は、「(本来すべきでないことを) する」という意味を付け加える補助動詞「しまう」の過去の形「しまった」(e.g. (3)) が間投詞として独立したものであろうが、直接表出の機能を担うようになると、(2) のように普通の述語として振る舞うことはできない。(なお、本稿は間投詞の意味構造の分析を主たる目的とするものではないので、この問題にはこれ以上は立ち入らず、別稿で詳細な分析を行いたいと思う。)

さて、このように、直接表出は人間のコミュニケーションの最も原初的な形態をなすものであるが、このことは、個体発生的観点 (i.e. 個人の成長・発達) からだけでなく、コミュニケーションの進化の点からも言えることである。というのも、人間以外の動物のコミュニケーションのほとんどは直接表出型のものであり、対象指示的なもの (例えば、次節で取り上げる指さしのようなもの) は、ほとんど見られないからである。大雑把に言って、人間以外の動物のコミュ

⁴ Bickerton (2007: 513, note 1) は、“Ouch!” や “Wow!” のようなタイプの間投詞は、他の語と合成構造を作らないので、true words とは言えない、と述べている。同様の考え方をする言語学者や文法学者も多いのではないと思われるが、それでは問題の解決になっていない。これらが言語表現であることは間違いないのだから、何故そのような特殊な表現要素が存在するのか、また他の語と合成構造を作らないのは何故なのか、を理論的に説明する必要があるのである。

⁵ 文の概念構造が客体描写 (命題内容) とそれにまつわる主観性領域 (モダリティ・発話行為) からなっている、という考え方は、細部に違いはあれ、これまで多くの学者によって提唱されてきたものである。詳しくは、古賀 (2004) 等を参照のこと。

ニケーション形態は以下の4種類であり、

- (4) 視覚的： 身体部分の色や形の変化、発光など
- (5) 聴覚的： 鳴き声、超音波、羽を擦り合わせる音など
- (6) 嗅覚的： 化学物質（フェロモン）、排泄物や体臭によるマーキング
- (7) 触覚的： 昆虫の持つアンテナ、サル⁶の毛づくろい（grooming）

その目的も食餌行動（餌の催促）・自己防衛（警告・威嚇）・求愛・仲間作りのような生存と繁殖に密着したもの（つまり、本能的に駆動されるもの）であるが、その中に、（人間の対象指示行為のように）何か外部の対象を示して、それを内容とするようなメッセージを伝えるものはほとんど存在しないのである⁶。その意味から言っても、コミュニケーションの原初形態は、個体発生的にも進化的にも、直接表出であると言ってよいのである。

3.2. 直接指示

対象指示の次の段階は直接指示（direct reference）即ち、相手の注意を対象物に何らかの方法で向けさせるということである。これには、対象物が相手に見えるようにするために何らかの操作をするという形も考えられるが、何といてもわかりやすい典型例は、指さし（pointing）である。（類似の形態をとるものとして、手さしや首ふり、視線移動などもある。）指さしは、もちろん大人でも行うのだが、ここで特に注目したいのは赤ん坊の成長過程におけるそれである。何故なら、赤ん坊の指さしは一般的に生後9～11ヶ月ころから見られるようになるものだが、子供の言語習得のみならず、認知能力やコミュニケーション能力の発達を測る重要な指標となっているからである。（やまだ（1987）、Butterworth（2003）、Tomasello（2003）、Hurford（2007））

⁶ もちろん、例外もある。例えば、有名なミツバチのダンス（花のありかを仲間に教えるためのダンス）や、ベルベットモンキーが仲間に天敵の襲来を知らせる警告の鳴き声などは対象指示的な性格を持つコミュニケーションの例と言っているかもしれない。これについては次の直接指示の項で取り上げる。

指さしは、それ自体としてみれば極めて単純な行為なのだが、そこには、言語による対象指示へと発展する重要な契機が潜んでいる。それは、（乳幼児の成長過程で言えば）この段階で初めて「自分の外部にある情報を特定の相手に伝える」というコミュニケーション構造が出現するということである。つまり、泣くだけであれば、自分の内部の心的状態（不快感）を外に向けて表すだけであるが、外部の対象を指さしすることにより、その対象を特定の他者とのコミュニケーションの場に引き込むことができるのである。そうすることで、対象の知覚をコミュニケーション相手と共有するという三項関係構造（i.e. 自分—対象—相手）を成立させることができる⁷。この構造は、一般に共同注意（joint attention）と呼ばれている。

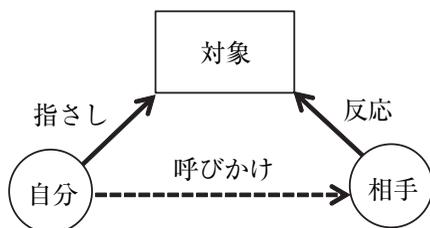


図3 共同注意（三項関係）の構造

共同注意の場を成立させることで、人は、どうしても直接には描き出すことのできない心の中の思いを相手に伝える代わりに、外部にある対象の知覚を相手と共有しながら認識の交流を図るという、新たなコミュニケーションの形を創り出すことができるのである。

⁷ 指さし（共同注意）には、対象に向かう関係だけでなく、発信者から受信者へ向けての直接の呼びかけも含まれていることに注意すべきである。なぜなら、そもそも自分の行為を相手に気づいてもらわなければ、相手の注意を対象物にむけることができないからである。実際、赤ん坊の指さし行為には、相手に対する言葉による呼びかけが伴っていることが多い（やまだ（1987））。また、指さしと呼びかけが別々の情報を表していて、実質的に2語文と同じ機能を果たす場合もあることが報告されている。（Goldin-Meadow and Butcher（2003））

因みに、指さしには、その内容的な面から、要求的 (imperative) なものと伝達的 (declarative) なものがあることが知られている。前者は、自分が欲しいものを指さす行為 (いわば I want that!) であり、後者は、興味を引いた対象を相手に伝える行為 (Look at that!) である。野生状態にある動物は、たとえ霊長類であっても、指さし行為を行わない。また、野生状態でなく人間の飼育下にあるチンパンジーは、指さし行為を (おそらくは学習して) 行うようになるのだが、それでも前者の機能にしか用いない。これに対して、人間の乳幼児の指さしの場合にはどちらの機能も見られ、前者よりもむしろ後者の方が最初から優勢のようである。(Butterworth (2003), Hurford (2007: Ch.7)) これは、対象知覚を相手と共有しようとする (つまり対象指示へと向かう) 欲求が人間には生得的にそなわっていることの表れとして考えてよいであろう。

前項で、「人間以外の動物のコミュニケーションのほとんどは直接表出型のものであり、対象指示的なものは、ほとんど見られない」と述べたが、実は例外と言ってもいいような行動も存在する。(と言っても、指さし行為ではないが。) 例えば、動物行動学の世界以外でもよく知られている、ベルベットモンキーの警告の鳴き声である。ベルベットモンキーは、天敵の種類 (空から襲ってくるタカ、木に登ってくるヘビ、地上から襲ってくるヒョウ) に応じて3種類の警告音を使い分け、そしてその警告音を聞いた他の個体は、それぞれの敵から逃れる行動をとるということが知られている。これは、伝達内容の対象が外部に存在しており、その情報を他の個体に伝えるという点で、確かに対象指示的ではある。(また、人間に至る進化の系統からは外れるが、有名なミツバチのダンスの例もある。)

確かにこれらは対象指示的ではあるものの、人間のコミュニケーションにおける直接指示とは質的に大きな違いもある。それは、メッセージの目的と種類の限定性の有無である。上にも述べたように、人間の直接指示は、既に乳幼児の段階から伝達的なもの、つまり純粹に対象知覚の共有自体を目的とするもの

が見られる。それを更にどのような具体的な目的に使うかは自由である。それに対して、飼育下のチンパンジーにしろ、野生のベルベットモンキーにしろ、メッセージの目的は生存に直接かかわる必要性（食欲の充足・危険回避）に限定されているのである⁸。人間以外の動物の場合、野生状態の生活形態は人間ほど社会化（メンバー同士の協力関係を通じた生活面・精神面の一体化）が進んでいないため、対象知覚の共有それ自体を目的とするようなコミュニケーションは、たとえあったとしても、生存に特に有利に働くことはないであろう。これに対して、人間社会は、集団内の他の個体との全般的協力関係を抜きにしては個々人の生存がかなわないような形で生活している。そのため、対象知覚の共有やそれを基礎とした様々な情報の共有は生存にとって欠かすことのできない活動になっているものと思われる。

3.3. 代用指示の成立

直接指示の三項関係を基盤としてその上に成立するのが代用指示である。直接指示においては発信者・受信者・指示対象は同じ場面の中に存在する必要があるが、代用指示においては、対象物が代用物に置き換わることにより、対象がコミュニケーション場面から分離することが可能となる。つまり、目の前にない物や過去に起こった（或いは未来に起こるであろう）出来事などを対象としたメッセージを発信することができるのである。言語の特徴の一つとして指摘される《対象からの分離可能性》（displacement）は、正に代用指示だからこそ実現できることなのである。

⁸ ほかに Bickerton (1990, 2007) や Hurford (2006) なども参照のこと。

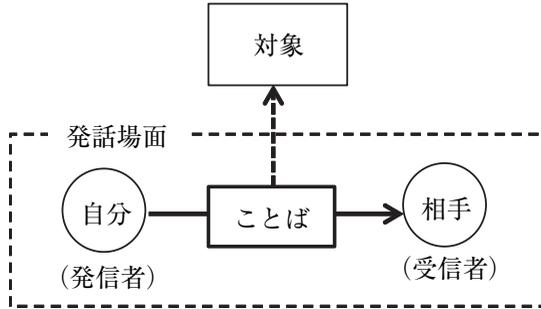


図4 代用指示（言語）の構造

因みに、文字が発明され、書記言語が登場すると、発信者と受信者が場面を共有することもなくなる。話し言葉でも、電話やテレビなどの遠隔通信手段が開発されると、空間的な場面共有をしない会話形態が登場し、録音・録画により時間的な場面共有すらしないコミュニケーション形態が現れるのである。

なお、ここで注意しておかなければならないのは、人間の認識発達において代用指示というものが成立するためには、その前段階として直接指示の理解が必要だということである。これは赤ん坊が個々の単語の意味を学ぶ過程を考えてみれば自ずと明らかになる。赤ん坊は、個人差はあるが、一般に1歳から2歳までの間に言葉らしきものを発し始め、2歳を過ぎた頃から急速に母語の語彙を増やしていく。単語を憶えるということは、ただ単に単語の音形だけを憶えていくことではない。どの単語がどのような種類の事物と対応しているかという対応関係を一つ一つ学び取りながら憶えていくのである。例えば、「ワンワン」という言葉を憶える際にも、まずはその実物（或いは、その画像や映像）を示されながら、それとの対応関係を一緒に覚えていくのである。親が犬を指して「ワンワンだよ、ほら、ワンワン」などと何度も繰り返す際に、赤ん坊は、親が自分の注意をある対象物に向けていることを理解し、その対象物を知覚したうえで、それがワンワンと呼ばれるのだと理解する。しかも、日本の中学生

が英語を勉強する際に英単語の意味を辞書で調べて理解するような場合とは全く違って、赤ん坊にとっては、直接指示以外に単語の意味を習得する方法はない。言い換えれば、直接指示の構造を踏み台にすることなしには代用指示の構造は獲得され得ないということなのである。

これが何を意味しているかと言えば、言語表現のような代用指示においても、直接指示の構造がその基底部分に維持されているということである。そのことが一番よくわかる例は指示詞（demonstrative）である。日本語のコレ・ソレ・アレにしる、英語の this/these や that/those にしる、話し手と対象物との空間的距離の認識がその意味の中に含まれていることは直観的にも明らかであるし、実際に会話でこれらの言葉を用いる際には、対象物を指さしながら用いることが多い。指示詞に関して更に重要な点は、これらの語の意味の中には必ず発話場面の認識が登場するという点である⁹。具体的な発話場面の中で話し手がどの対象物を指して「これ」と言ったり、「あれ」と言ったりしているかが理解できなければ、これらの表現の意味は解釈不可能であり、その解釈のためには、話し手（及び聞き手）と対象物との間の空間関係が発話場面の中でどのような位置関係になっているかが、聞き手にわからなければならない。つまり、これらの語は、その意味の中に、発話場面の認識を予め組み込んだ形になっているのである。本稿では取り上げないが、実は、指示詞のみならず、人称代名詞や直示的表現（deictic expression： e.g. here, now, today）についても同様のことが言える。

しかし、直接指示（共同注意）の構造は、何も代名詞や直示表現のみにそなわっているわけではない。普段意識しないため、なかなか分かりにくいのだが、語から文に至るまでの、意味を持つすべての言語単位に直接指示の構造が隠れ

⁹ 認知文法ではこれを Ground と呼んでおり、名詞句における限定詞や定形節における時制辞の働きは、モノ概念や事態概念の発話場面に対する認識的關係を明示することであると考えている。

ているのである。筆者はこれを「意味の三層構造」と名付けて、古賀（2004）においてまとめ、それ以後もいくつかの英文法の現象の背後にそれが見られることを指摘してきた（古賀（2005, 2006, 2009, 2010）。ここで展開した、代用指示へのコミュニケーションの段階的発展の図式は、意味の三層構造仮説を、言語の個体発生と系統発生の両面からサポートするものであることを指摘しておきたい。

4. 概念的認識の成立過程

第1節で見たように、言語は単に代用指示の構造を持つのみならず、指示の途中に概念という特殊な認識による媒介構造が存在する。人間が概念を駆使できるのは、高度な抽象能力が備わっているためであり、これは遙か古代ギリシャの昔から学問をする人々の関心の的であった。プラトンのアイデアは、我々の言う概念を彼なりのやり方で捉えたものであったし、それ以降、西洋哲学の歴史の中で認識論の中心的なテーマの一つは、人間が概念的認識をいかにして得ることができるか、ということであった（e.g. 唯名論 vs. 実念論の論争）。

哲学における論争はさておき、我々にとって自明な事柄をもとに、概念的認識の基本構造を考えてみると次のようになる。即ち、外界に存在する個々の事物は相互に異なった側面を持つと同時に、類似性・共通性をそなえている。人間は、そのような事物の一つ一つをそれぞれのものとして見るだけではなく、「どのような類に属するか」という観点から整理分類して把握する。そして、同じ類に属する（と判断した）事物は、その一つ一つに細かな違いがあっても、大まかな共通性を捉えて、「同じ種類のもの」として把握するのである。この《個々に違うものの中から共通性を見出す能力》のことを抽象能力といい、その抽象した共通性によって諸対象をグループ分けすることをカテゴリー化というのだが、人間の場合、これらの能力が極めて高度に発達している。その抽象能力とカテゴリー化能力を駆使して、類似した諸々の対象をひとまとまりの集

合体（＝類）として把握したところに成立する認識が概念なのである。

ここで問題になるのは、では、抽象能力やカテゴリー化能力はどのように進化してきたのだろうか、ということである。人間がこのような能力を高度なレベルで具備していることは確かだが、それらの能力が人間の段階に至って突如として現れてきたと考えるのは不自然である。ならば当然、人間に至るまでの進化の過程にその前段階を見出すことができるはずである。

4.1. 類認識の起源

実は、生命誕生から人間に至るまでの40億年近くにわたる進化の歴史のごく初期の頃から、抽象能力の萌芽は存在していたであろうと思われる。生物は、代謝（外界との物質のやりとり）を通じて自己更新を行いながら自己の形態の同一性を維持し続ける存在である。そして、生命を維持するためには、外界からの刺激を感知して、自己の生存にとって有利になるような特定の反応をするような仕組みを持つておかなければならない。驚くべきことに、そのような定型化された反応（特定の刺激に特定の仕方でも反応すること）は、既に、生物の最も単純な存在形態である単細胞生物においても見られるのである。学校の理科の時間に教わる《走性》と呼ばれる反応である。

走性とは、光・音・温度・化学物質などの外界刺激に対して、それに向かって、或いはそれから離れるように動くという反応を示す性質のことである。このような性質を持つということ、単細胞生物のような極めて原始的なレベルの生物であっても、特定の刺激に対してどう反応すれば自らの生存・繁殖の可能性を高めることができるか、ということ“知っている”ということ意味している。

“知っている”と言っても、もちろん、我々人間のようにそういう知識を蓄えているという意味ではない。そういう反応をするような仕組みを遺伝的に内在化させているということである。これは、生存競争において、そのような定

型反応を生得化させた個体が高確率で生き残る、という淘汰過程の積み重ねの結果である。我々はこのような生得化された情報処理機構のうち、特に行動に関わるものを本能と呼んでいる。つまり、本能とは遺伝的に内在化され継承される、定型的な行動様式のことなのである。ここで注意すべきことは、このような定型化された反応が成立するということは、最も単純なレベルの生命体であっても、外界からの様々な刺激の中のうち、特定の種類のものをその類似性において“同じもの”として捉え、それに対して特定の種類の反応をする、という一般化された情報処理が行われているということである。つまり、外界の事物をカテゴリー分けして“類”というフィルターを通して認識するという仕組みの出発点は、正にここにあるのである。(リードル (1991))

生物が多細胞化し、動くことを本質とする動物という種類の生物が登場すると、このような一般化された情報処理を担う生理機構がはっきりと見える形で登場してくる。動物は、動き回ってエサをとったり、敵から逃げたりすることで、自らの生存を達成する。そして、そのために、外界刺激を感知する感覚器官と、その情報に基づいて自らの行動を制御する運動器官、そして、その両者を仲介する神経系を分化させたのである¹⁰。

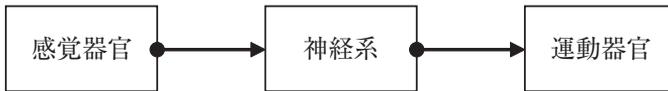


図5 定型反応の器官分化

4.2. 脳の成立と記憶・心的シミュレーション

下等な動物においては、感覚入力も運動制御も比較的単純な定型反応の組み

¹⁰ ここでは運動制御に関わるものだけを取り上げているが、厳密に言えば、定型反応には運動制御に関わるものだけでなく、体内の諸反応 (e.g. 食物の消化・吸収や血液循環) がある。

合わせで事足りるが、体の仕組が高度化してくるにつれて、感覚器官・運動器官（つまり情報の入力・出力）ともに多系化し、複雑化してくる。そうなると、複数の経路から入ってくる入力情報をまとめ上げ、外界のあり方を総合的に判断し、行動の仕方を決定して、更にそれを実現するために運動器官の複雑な制御を行う、というような一連の作業を担うための専用の中枢器官が必要になってくる。それが脳である。脳の成立とともに、おそらくは、外界のあり方を統合的な像（representation）としてほぼリアルタイムに脳の内部に再現する場、即ち《意識》も成立したであろうと思われる¹¹。

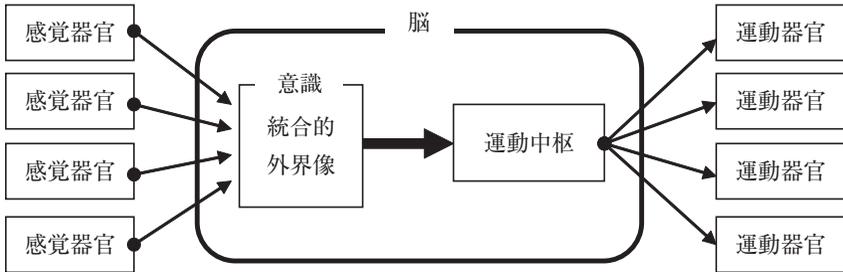


図6 脳の基本的情報処理経路

脳の発達と共に、個体が自分の経験から得た情報を長期間保持するシステム、すなわち記憶の回路が整備される。これは、自らにとって利益あるいは害悪となるような種々の外界刺激や行動のパターンを神経ネットワークの中に情報として保持し、自らの行動決定に役立てるためである¹²。そうすることで、生物個体は、様々な外界情報を、本能のような生得的形式によらずに保持することができるようになる。

¹¹ このように、意識は主に行動（即ち、外界への働きかけ）を制御する場としてきた誕生したものなので、体内で起こる諸反応は、通常、意識にはのぼってこない。

¹² 人間以外の動物が記憶しているのはあくまで事象のパターン（類認識）であって、個々のエピソードそれ自体ではないと考えられる。記憶研究では、人間以外の動物にはエピソード記憶は存在しないと言われているのである。（Hurford（2007））

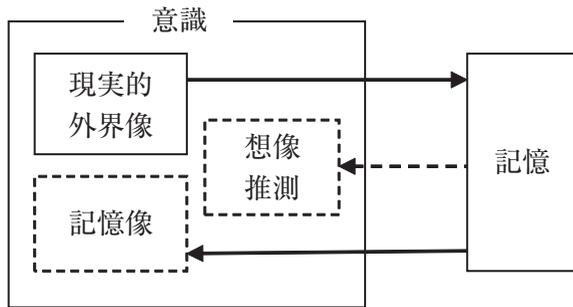


図7 意識と記憶の関係

それまでは、本能に従うだけの定型的行動パターンしか取れなかったものが、
個体経験を通じて獲得した記憶情報に基づいて、より巧妙で洗練された行動を
することができるようになるのである。一昔前までは、人間以外の動物の行動
は、本能に制御された自動的・機械的な反応の組み合わせでしかない、といっ
たような誤解も広く存在していたが、行動観察や実験を通じてわかってきてい
る動物行動の多様性・巧妙性を見るならば、そこには記憶情報に基づいて高度
な思考を駆使しながら厳しい環境を生き抜いている動物たちの姿が浮かび上
がってくるのである。(Griffin (1984, 2001))

また、それに関連して、外界の様々な事象パターンやそれに対する自らの適
切な行動パターンを記憶できるようになると、そのパターン認識に基づいて、
現在あるいは近い将来の外界のあり方を予測し、それに応じて行動計画を立て
て活動することができるようになる、という点にも注意しておく必要がある。
つまり、外界の事象に関する心的シミュレーション (mental simulation) がで
きるようになるのである。これが、想像力の起源である (リードル (1991),
Bickerton (1990))。想像力 (心的シミュレーション能力) に関して重要な
のは、それが働くためには、その前提として、様々な外界事象に関する一般化さ
れた (つまり、パターンとして抽出された) 認識が必要だということである。

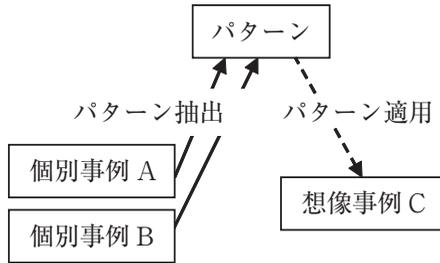


図 8 パターンの記憶と心的シミュレーション

何故なら、実際には生起していない（或いは生起していたとしても自分にはまだ知覚できない）出来事を頭の中で思い描くということは、それを「Aが起こればBが起こる」というような形で予測するという他に他ならず、そのような予測ができるためには、事象発生の一般的なパターンを予め知っておかなければならないからである。

4.3. 子育ての登場

動物界全体を見渡すと、その大半では、子供は卵生であり、基本的に生みっ放しである。子供は、卵の状態で生まれ、後は持って生まれた本能と個体経験から得た情報を頼りに、自分の力だけで生き抜いていかねばならない。もちろん、一部に、子供が卵からかえるまで（或いはその後しばらく）子供を親が保護するような動物も見られるが、鳥類を除く卵生動物の大半は子育てをしない。動物の進化史上、鳥類と哺乳類において初めて、子供が生まれて独り立ちできるようになるまで親が子供の世話をし、子育てという生活形態が登場したのである¹³。

これにより何が変わったか？それまでは、遺伝を通じてしか子供へ継承する

¹³ 鳥類・哺乳類より以前に地球上で繁栄を極めた恐竜の中に、子育てをしていたものがある可能性も指摘されているが、ここでは、その問題は置いておく。

ことができなかつたような知識や技術を、遺伝によらずに教育を通じて伝えることができるようになってきたということである。それまでは、個体が自らの経験を通じて得た情報は、その個体の死と共に消えてしまい、次の世代に伝えることはできなかつた。本能という生得化された形で伝えられる以外の情報の獲得は、各個体の試行錯誤に任されていたのである。しかし、子育てにより、エサのありか、エサの効率的な獲り方、巣作りの場所・方法など、環境による変動を受けやすい情報も親から子へ伝える道が開けたのである。これは、次項で見る、個体間での情報共有の第一歩であると言える。

4.4. 集団生活と認識の共有

ここまで来れば、概念的認識、およびそれを用いた言語による対象指示の成立まではあと一歩である。では、最後に必要な一歩は何か？それは、認識の共有ということである。個体が、外界に関する一般化された認識を形成し、それを用いて自己の生を全うするだけなら、それは単なる個体の認識で終わってしまう。それが対象指示（特に代用指示を用いたそれ）というコミュニケーションに利用されるためには、その認識を他の個体と共有しようという意志が働かなければならないのである。そのような共有認識成立へ向けての指向性がどのようにして芽生え、発展していったかについては、まだ今のところ、仮説的な形でしかものが言えない。しかし、論理的に考えれば、個体同士での認識の共有が定常的に成り立つためには、以下のような進化的前提がなければならないことがわかる。

まず、第一に、当然のことではあるが、集団生活の存在である。多くの動物は、繁殖時を除いて独りだけで生活する。このような動物にとっては、他の個体とのコミュニケーションとは、つがい相手探しと縄張りの主張といったことでしかない。そのような状況では、自己の中に生じた多様な認識を他の個体と共有することはあまり意味がない。エサのありかや快適な生息場所といった貴

重要な情報を他の個体に教えてしまえば、むしろ自分の生存が不利になってしまうのである。これでは、本格的な認識の共有など発達しようがない。少なくとも、群れを作って行動し、その中である程度の情報共有が行われるような生活形態が存在しなければならないのである。

では、集団で暮らしていればそれでいいかということ、そうでもない。霊長類やその他の高等哺乳類でも群れを作って生活する動物は数多くいるが、人間並みの複雑な共有認識やコミュニケーションを進化的に発達させたのは、人間だけである。では、人間とそれ以外の集団生活動物を分けるポイントになったものは何だろうか？ 仮説的（或いは思弁的）にはいろいろな要素が考えられるのだが、ここでは、集団の成員どうしの協力関係の深化とそれに伴う共有情報の汎用性ということを指摘しておきたい。

人間の社会と他の動物の群れを見比べてみたときにはっきりと浮かび上がってくるのは、その成員どうしの協力関係のレベルの違いである。今日我々が暮らす文明社会では、我々が手にする衣食住全般にわたる生活資源のどれ一つをとってみても、自分で（それも自分の力だけで）一から作り出したものなど何もない。社会の中の協力関係により提供されているものばかりである。また、一見、文明とは遠く隔たっているように見える最も原始的な生活形態の社会であっても、成員どうしの高度な協力関係という本質は変わらない。狩猟採集のような食糧の調達は当然のことながら、住居の建設やその他の環境の整備、衣服や種々の道具類の製作に至るまで、成員がそれぞれ自力で勝手に行っているわけではなく、互いにコミュニケーションを取りながら協力して行っているのである。そもそも、人間は、他の動物に比べて圧倒的に未発達な状態で生まれてくる（ポルトマン（1961））ので、親を含めた周囲の人間の密接な協力関係がなければ、まともに育つことなどできないのである。その意味では、人間は、社会的協力関係の中で生きていくことを運命づけられ、またそれが本能化している動物であると言えるかもしれない。

このような高度な社会的協力関係を維持するためには、個体どうしで多種多様な情報がやり取りされ、共有されなければならない。食に関わる情報に限ってみても、単にエサのありかというだけでなく、獲物の習性、季節による収穫の変動、効果的な武器の製作法や使用法、食物の調理法、食べられるものと食べられないものの区別など、挙げていけばきりがないほどである。つまり、やり取りされる情報の種類に限度がなく、汎用的なのである。

共有情報の汎用性は、我々が持つ自然言語にも反映されている。人間の用いる言語は、どの個別言語であっても、語彙の種類に限りがない。人間の生活にとって必要な（或いは、特に必要でないように思われることであっても）あらゆることを表すことができるし、足りなくなれば、既存の語を転用したり、新語を創出したりすることで、いくらでも補うことができる。つまり、汎用性が極めて高いのである。他の動物におけるコミュニケーションの中身が、生存・繁殖の直接的必要性（典型的に、エサ・縄張り・天敵に関わる情報）に限定されているのとは大きく違うのである。

4.5. 人間の認識の汎用性と無限性

以上見てきたように、人間の概念的認識は、進化上の遠い祖先から受け継いできた、類認識の本能的な形成能力が以下の発展的諸段階を経ながら出来上がってきたものである。

- (8) 脳の誕生と記憶機構の整備
- (9) 心的シミュレーション能力（想像力）の獲得
- (10) 子育てを通じての情報の非本能的継承
- (11) 社会的協力関係の高度化とそれに伴う共有情報の汎用化

概念的認識が言語を通じて社会的にやり取りされ共有されるようになると、人間の認識世界（統合的外界像）は、時空間的に無限の広がりを獲得する。個体の認識は、他の個体との情報共有がなければ、自分一個の持つ本能と個体経験

に基づくものに限定されてしまうが、他の個体と情報共有を（しかも汎用的に）行うことで、他の個体の持つ情報を間接情報として受け取ることができる。これにより、自分で行ったことのない土地に関する知識を得たり、遠い過去の話の聞いたりすることで、自分の認識世界を時空間的にどこまでも広げていくことができるのである。

また、共有情報の汎用性は、社会的協働による外界への働きかけ（事物の人工的作り変え）を通じて、人間の認識に自由なカテゴリー化能力を実現することになる。事物に働きかけ、その結果や特徴に関して得た知識を社会的に共有することで、事物を様々な特性に基づいて自在にカテゴリー化できるようになるのである。このようにして、食物のみならず、建築素材、道具素材、動植物や土地の特性、気候の特徴など、生活をめぐるありとあらゆる分野の事物が様々な側面やレベルで分類され、概念的認識として社会的に蓄積されるとともに、文化遺産として世代を超えて継承されるようになるのである。今日我々が家庭教育や学校教育で教わる内容はこのような文化遺産の結晶であると言える。

5. まとめ

本稿では、言語の本質的な特性である対象指示の構造を、その認識過程と個体発生的・系統発生的成り立ちの面から考察した。初めに、対象指示の基本的な在り方を提示した上で、それが代用指示と概念による媒介という2つの構造を内在させていることを指摘した。次に、それぞれについて、その成り立ちを考察した。代用指示は、個体発生的にも系統発生的にも、直接表出と直接指示（共同注意）という2つの前駆的コミュニケーション形態を経て実現されるものであり、代用指示（そして言語）そのものの中にも直接表出と直接指示の構造が含まれている。また、生物は、その最も原初的な段階から、外界からの刺激を類的に捉え反応する仕組みをそなえており、それが、人間のような、概念的認識を自在に駆使できるレベルに達するまでに通る諸段階には、少なくとも、

脳の誕生・記憶機構の整備・心的シミュレーション能力の獲得・子育てを通じての情報の非本能的継承・社会的協力関係の高度化・共有情報の汎用化がある。

本稿で展開した考察は、言語における対象指示の構造を原理的に分析していくための、いわば準備作業のようなものである。そこで次には、ここでの議論を土台として、名詞句の定性 (definiteness)、特定性 (specificity)、指示的・属性的描写 (referential/attributive) を初めとする、対象指示にまつわる諸特性を一貫した理論的枠組みで叙述してみたいと考えている。

References

- Bickerton, Derek (1992) *Language and Species*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Bickerton, Derek (2007) “Language Evolution: A Brief Guide for Linguists.” *Lingua* 117, 510–526.
- Butterworth, George (2003) “Pointing is the Royal Road to Language,” in Kita (ed.), 9–34.
- Goldin-Meadow, S. and C. Butcher (2003) “Pointing toward Two-word Speech in Young Children.” in Kita (ed.), 85–108.
- Griffin, Donald (1984) *Animal Thinking*. Harvard University Press, Cambridge, Mass.
- Griffin, Donald (2001) *Animal Minds*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Harris, R. and T. J. Taylor (1989) *Landmarks in Linguistic Thought: The Western Tradition from Socrates to Saussure*. Routledge, London.
- Hawkins, John (1978) *Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and Grammaticality Prediction*. Croom Helm, London.
- Heim, Irene (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*. Doctoral Dissertation, University of Massachusetts.
- Hurford, James (2007) *The Origins of Meaning: Language in the Light of Evolution*. Oxford University Press, Oxford.

- Kita, Sotaro (ed.) (2003) *Pointing: Where Language, Culture, and Cognition Meet*. Lawrence Erlbaum Associates, New Jersey.
- 古賀恵介 (2004) 「意味の三層構造仮説」『福岡大学人文論叢』36-1, 107-135.
- 古賀恵介 (2005) 「文とは何か」『言葉の標 平井昭徳君追悼論文集』(大津・西岡・松瀬 編)九州大学出版会 71-84.
- 古賀恵介 (2006) 「挿入節について」『福岡大学人文論叢』38-3, 819-852
- 古賀恵介 (2009) 「認知文法における副詞の意味構造」『福岡大学人文論叢』41-3, 1095-1123.
- 古賀恵介 (2010) 「副詞節の修飾構造について」『福岡大学人文論叢』42-1, 131-161.
- Langacker, Ronald (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press, Stanford, California.
- Langacker, Ronald (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2: Descriptive Applications*. Stanford University Press, Stanford, California.
- Langacker, Ronald (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press, Oxford.
- Lyons, Christopher (1999) *Definiteness*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 三浦つとむ (1967) 『認識と言語の理論 第1部』勁草書房、東京。
- 三浦つとむ (1976) 『日本語はどういう言語か』講談社、東京。
- 野本和幸 (1988) 『現代の論理的意味論』岩波書店、東京。
- ポルトマン, アドルフ (1961) 『人間はどこまで動物か』岩波書店、東京。(Portmann, Adolf (1944) *Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen*. Schwabe Verlag, Basel)
- Povinelli, D., J. M. Bering and S. Giambrone (2003) “Chimpanzees’ ‘pointing’: Another Error of the argument by analogy?” in Kita (ed.), 35-68.
- リードル, ルベルト (1991) 『認識の生物学 理性の系統発生史的基盤』思索社、東京。(Riedl, Rupert (1981) *Biologie der Erkenntnis: Die stammesgeschichtlichen Grundlagen der Vernunft*. Verlag Paul Parey, Berlin.)
- Tomasello, Michael (2003) *Constructing a Language: A Usage-based Theory of Language Acquisition*. Harvard University Press, Cambridge, Mass.
- やまだようこ (1987) 『ことばの前のことば』新曜社、東京。